

今週のメニュー

[トピックス](#)

越谷エコフェスタに参加

- 越谷青年会議所主催の環境まつりに共感 -

[随想](#)

古代ヤマトの遠景(38) - 【三角縁神獣鏡】(1) -

信越化学工業(株) 木下 清隆

[編集後記](#)

トピックス

越谷エコフェスタに参加

- 越谷青年会議所主催の環境まつりに共感 -

7月18日、越谷市のレイクタウン見田方遺跡公園で「越谷エコフェスタ」が開催されました。越谷市は環境問題に熱心に取り組んでいる自治体で、越谷青年会議所が中心になって企画推進した初めての催しです。「越谷エコフェスタ」では、環境に関する活動をしている団体・企業の展示と実演が行われ、東彩ガス、パナソニック、環境ネットワーク埼玉、東京サンツール、日本たばこ産業、越谷リサイクルプラザ、越谷おもちゃの病院、JAなどの団体・企業が参加されました。



当協会がこの催しに参加することになったキッカケは、ホームページのお問い合わせに越谷青年会議所の方から塩ビ製品と環境に関する展示の協力依頼があったことからです。この方が経営されている会社では再生品の塩ビ管を取り扱われていたため、リサイクルへの関心も高く、ご縁があったものと思っています。4月にお問い合わせを頂いてから、実際の打合せを数回行い、とんとん拍子にブースでの展示が決まりました。

本番には、当協会がリサイクル支援制度で支援している積水化学工業の「フラクタル日除け」とその説明パネルや、出前授業で使っている色々なプラスチック製品とリサイクル活動のパネルを並べました。また、配布用に「かんきょうワークノート」、「環境最前線」、「リサイクル消しゴム」を準備しました。「フラクタル日除け」は既に日本科学未来館で展示され、新聞やTVでも取り上げられたものですが、今回の展示用には約2m四方の小規模なものを準備しました。



これが！フラクタル日除け。

開幕して直ぐに、立ち寄られた市民の方が「これがそうか。新聞で見たよ！」と言われて、「フラクタル日除け」を熱心に眺めたり触ったりして質問をされました。その後も何人かの方が訪れましたが、既にご存知の方が多いのには驚きました。また、出前授業の資料をみて、同じような取り組みをされている方と情報交換が出来ました。小学生を相手に、プラスチックに関する出前授業も行いました。その際、塩ビリサイクル材を使った消しゴムは、子ども達の興味を呼び、大変喜ばれました。



親子連れの方に塩ビの説明

会場は越谷レイクタウン駅前の遺跡公園で行われましたが、集客能力の大きな商業モールへの道から外れていることもあり、一般市民の関心はやや薄かったようです。その一方で、参加団体・企業同志の交流や料理コンテストは盛り上がり、参加者自身が大いに楽しむことが出来ました。

今後も、このような市民が中心になって進められている環境や教育をテーマにした催物に積極的に協力して行こうと考えています。地域の地道な活動に身近な距離で接し、一緒に活動することで、生の声を聞き仲間の輪が広がる機会になるものと思っています。最後に、このような機会を頂いた熱心な越谷青年会議所の皆様と炎天下にフラクタル日除けを組み立てて頂いた積水化学工業の皆様にご挨拶いたします。(了)



「越谷青年会議所」

<http://www.koshigaya-jc.com/>

随想

古代ヤマトの遠景(38) - 【三角縁神獣鏡】(1) -

信越化学工業(株) 木下 清隆

前回までに述べたように、「出雲王家」と命名されるような王家が3世紀中葉に誕生し、この王家の次に「応神王家」が4世紀の後葉になって誕生する。なぜ、このような王家が誕生したのかについては、大きな政治情勢の変化があったからだと言えるが、この話に入る前に出雲王家時代の重要問題について少し説明しておくことにする。

それは「三角縁神獣鏡」問題と、「前方後円墳」問題である。これら二つは考古学的には未だ解決されていないと言う意味で「問題」としたが、ここではその問題の解明ではな

く、何が問題とされているのか、これらが古代学の解釈においてどのような意義を有しているのか等について説明することにする。話の順序としては歴史的に古い「三角縁神獣鏡」から始めることにする。

日本においては「三角縁神獣鏡」は、何となく卑弥呼に関連する銅鏡として知られているようであるが、銅鏡そのものは古くから中国で製作されており、紀元前3000～4000年くらいまでは遡ると云われている。そのような中国鏡が我国へ将来された歴史は古く、弥生時代には各地の首長クラスが既に保持していたことが知られている。それは、各地で発掘されている弥生時代の墳墓の中で、多くの首長クラスの埋葬棺の中に、銅鏡が割られた形で副葬されているからである。このような破鏡の習慣は古墳時代になると無くなるが、いずれにしても銅鏡については「辟邪」の効能があると考えられていたようである。



さまざまな三角縁神獣鏡



三角縁神獣鏡

このように古い歴史を持つ中国鏡だから、その裏面のデザインも多岐に亘り、これに応じた多くの名称が伝えられている。例えば、「連弧文鏡」「内行花文鏡」「方格規矩鏡」「画文帯神獣鏡」等である。このような銅鏡群の中であって、「三角縁神獣鏡」は極めて特異な鏡とされており、その登場は比較的

に新しく3世紀の卑弥呼の時代となっている。「三角縁神獣鏡」とは、銅鏡裏面の外周断面が三角形を成しており、神獣文様が内面を飾っているものを云う、とされている。この場合の「神」とは、中国神仙思想の神である西王母・東王父を指し、「獣」とは、天の四方を司る「青龍」(東)、「白虎」(西)、「朱雀」(南)、「玄武」(北)といった霊獣・神獣を指している。

魏が、遼東から朝鮮半島北部にかけて勢力を張っていた公孫氏を滅ぼすと、卑弥呼は翌年の景初三年(239)に魏朝へ朝貢の使者を遣わした。これに対し皇帝は卑弥呼を「親魏倭王」となし、金印紫綬を賜った。更に女王へは多くの贈物が下賜されたが、その中に銅鏡百枚が含まれていた。

明治期以降、各地で三角縁神獣鏡が発見されだすと、これは卑弥呼が魏の皇帝から下賜された魏鏡ではないかとの学説が有力となり、1972年に出雲の「神原神社古墳」から「景初三年」銘のある三角縁神獣鏡が発見されるに及んで、卑弥呼に下賜された鏡は三角縁神獣鏡であり、これは「魏鏡」であるとの説が一挙に有力となった。

ところが1981年になって、とんでもない事件が起き、学会は大いに混乱する。それは、中国古代鏡の専門家である王仲殊氏が『日本の三角縁神獣鏡の諸問題』と題する報告を行ない、その中で従来日本の学説を全面否定したからである。その主要な主張を整理すると次のようになる。

- (1) 三角縁神獣鏡は日本では大量に出土するが、中国では未だ一枚も出土していない。
- (2) 日本の三角縁神獣鏡は、直径が20cm以上もあるのに対し、3世紀頃の中国鏡は10cm程度しかなく、はるかに大きい。

- (3) 三角縁神獸鏡の中にある文様は、いかなる中国の出土鏡にも見られない。
- (4) 三角縁神獸鏡と相似している「平縁神獸鏡」と「三角縁画像鏡」は、南方の呉地方で産する「呉鏡」であって、北方の「魏鏡」ではない。
- (5) このような理由により、三角縁神獸鏡は中国で製作されたものではなく、呉の職人が倭国に渡り、倭国内で製作したものであると考えられる。

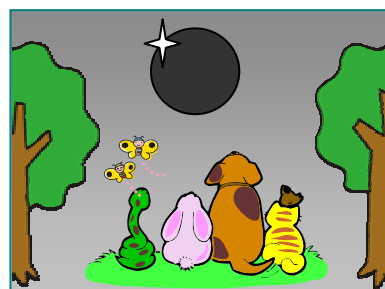
以上のような主張は、素人には極めて尤もであり反論の余地も無いのではないかと思います。王氏が指摘した内容の幾つかは我国の専門家の中で、既に論議されていたものもあるが改めて本家筋から、問題の本質を総括し日本の考え方は間違っていると批判されると、これまで積み上げてきた積み木を一気に壊されたようなもので、当時の学会が大いに混乱したのは当然のことと言えよう。これ以降、日本の古鏡学は新規蒔き直しとなるが、この混乱の中から若き専門家たちは、全く新しい視点から、曙光を見出し始める。(つづく)

前回の「古代ヤマトの遠景」(37)【王家の区分】は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/231/mag_231.pdf

編集後記

気象庁が、異例にも関東・甲信地方の本州では最初の梅雨明け宣言をしましたが、それ以降、皮肉にも梅雨の様な鬱陶しい日が続いています。去る7月22日午前、奄美大島やトカラ列島の悪石島などの日本の陸地で46年ぶりに皆既日食の天体ショーが期待されましたが、残念ながら曇りや雨模様で皆既日食の観測は硫黄島などを除き出来ない所が多かったそうです。東京でも曇りで、早々と観測は諦めてしまいましたが、夜のTVでは雲の合間に部分的(約75%)に欠けた日食が観測できたと報道されていました。



次回の皆既日食は26年後の2035年9月、北陸や北関東で観測されるとか、無事観測できるには、天候はもちろん自分が健康で元気なことが必要で、是非、26年後の観測を一つの目標にしたいですね。(古鍋)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601 FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp> E-MAIL info@vec.gr.jp